HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	三巻本『枕草子』「また、業平の中将のもとに」の段をめぐって ： 章段配列との関わりから
Author(s)	石垣, 佳奈子
Citation	国語国文研究, 139, 1-17
Issue Date	2011-03-28
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/93224
Type	journal article
File Information	kokugokokubunkenkyu_139-01-17.pdf



Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

三巻本『枕草子』「また、業平の中将のもとに」の段をめぐって

――章段配列との関わりから――

石垣佳奈子

はじめに

三巻本『枕草子』[注1]の巻末部には、次のような連続した三つの章段が存在する。

【第二八七段】

右衛門尉なりける者の、えせなる男親を持たりて、人の見るに面伏せなりと、苦しう思ひけるが、伊予国よりのぼるとて、波に落し入れけるを、「人の心ばかりあさましかりける事なし」とあさましがるほどに、七月十五日、盆奉るとていそぐを見たまひて、道命阿闍梨、

わたつ海に親おし入れてこのぬしの盆する見るぞあはれなりける

とよみたまひけむこそ、をかしけれ。

【第二八八段】

小原の殿の御母上とこそは、普門といふ寺にて八講しける、聞きて、またの日、小野殿に人々いとおほくあつまりて、遊びし、文作りてけるに、

薪こることは昨日に尽きにしをいざ斧の柄はここに朽さむ

とよみたまひたりけむこそいとめでたけれ。ここもとは打聞になりぬるなめり。

【第二八九段】

また、業平の中将のもとに母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあはれにをかし。ひきあけて見たりけむこそ、思ひやらるれ。

第二八八段の「打聞」は、第二五八段「うれしきもの」の「もののをり、もしは、人々言ひかはしたる歌の聞えて、打聞などに書き入

れらるる。」などの記述から、人から聞いた興味深い歌を書き留めたものとわかる。また、この三章段に続く第二九〇段には、「をかしと思ふ歌を草子などに書きておきたるに」とあり、第二九〇段も「打聞」関連の記述という点によって前段に続けられたように見える。そして、この三章段は、最初の段の「男親」、次の段では「御母上」、さらに次の段では「母の皇女」と続き、親という一貫したテーマのもとに配列された打聞章段群として構成されていると理解することができそうである。

しかし、そのような理解のみで本当によいのか。この三章段の性質を考える上では、なおいくつかの問題が存在すると思われるのだ。第一に、もし『枕草子』に歌についての覚え書きを書くことが当然であるなら、なぜ「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きが必要だったのか。作者以外の詠歌を語ることを中心とする章段には、清少納言の出仕前と見られる時期に宮中で詠まれた歌について語る第一七五段「村上の先帝の御時に」や、出仕後に詠まれた定子の歌について書く第二二三段「三条の宮におはしますころ」、第二二四段「御乳母の大輔の命婦、日向へくだるに」、第二二五段「清水に籠りたりしに」等があるが、いずれも宮中で詠まれた歌、それも特に定子本人や周辺の歌が書き留められている。[注2]これらに対し、先の三章段の歌は定子付き女房としての作者とはまったく関わらないかのような歌である。そして、宮中や定子と関係しない打聞を書いた箇所は他にほぼ見えない。つまり、『枕草子』にこのような「打聞」を書くことは異例なのだ。そもそも「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書き自体が、『枕草子』の一部として本来は書くべきではなかったことを思わず書いてしまったという違和感を表明するものだったと考えられるのである。

第二の問題としては、「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きの位置の不自然さがある。打聞集成としての三章段という構成意識があるのならば、この断りは、二章段目の第二八八段ではなく、第二八九段の末尾にあってほしいようにも思われる。また、もし、書いていて知らず知らずのうちにその内容が打聞になってしまったことに気づいた作者がこの断りを入れたのならば、その後は軌道修正を図りそうなものであるのに、第二八九段に至っても歌についてのメモのような叙述が続くことも落ち着かないように感じる。これは、たまたま筆が止まらなくなって、叙述の順番が少しおかしくなってしまっただけなのだろうか。

このように、この三章段は、一見「親」というテーマのもとに構成された打聞章段群のように見えて、実はそれだけでは説明できない様々な問題点を抱えている。本稿では、この三章段、中でも、特にその位置づけに問題があると考えられる第二八九段「また、業平の中将のもとに」の段について考察していきたい。

一　三章段の連続性と断絶性

すでに述べてきたように、第二八七段から第二八九段までの三章段の位置づけには様々な問題があると思われるのだが、さらに第二八八段の冒頭「小原の殿の御母上」という箇所には本文上の問題もある。ここは、『新全集』[注3]の底本である三巻本系統第一類本の陽明文

庫蔵本では、「をはらのとのゝ御はゝうへ」と表記されている。一方、能因本（学習院大学蔵三条西家旧蔵本）では「また小野殿の母上」、前田家本では「またふの殿ゝはゝうへ」となっている。（堺本にはこの章段は存在しない。）

この章段の和歌は、『拾遺和歌集』巻第二十・哀傷・一三三九にも見えるが、そこでは作者は「春宮大夫道綱母」と記載され、『拾遺抄』巻第十・雑下・五七二では、この歌の作者名は「右近大将道綱母」となっている。さらに、同じ歌が『道綱母集』三六番歌、『蜻蛉日記』巻末歌集にも載ることから、この和歌を詠んだのは藤原道綱母だと考えてほぼ間違いはない。道綱は寛弘四年（一〇〇七）正月二十八日に東宮傳になっており（『公卿補任』）、『角川文庫』は「傳の殿」とあるのが正しい。三巻本の誤写と思われる。」と注し、『学術文庫』も「傳の殿（道綱）の御母上」と解しておきたい」という。また、『新全集』も「傳の殿」という呼称を考慮して「ふ」「小」は誤りやすい」と指摘する。さらに、道綱を「小原の殿」と呼ぶ例は他に見えない上、「小原」と道綱の関わりも、この本文以外からはまったく確認することができない。やはりここは、元は「ふの殿」という本文だったと考えてよいであろう。[注4]

そして、三巻本の本文が本来「ふの殿の御母上」だったことから導き出される重要な点は、この章段において、道綱母がその没後、道綱が東宮傳となった寛弘四年正月以後の呼称によって登場していることである。これは、『枕草子』の成立とも関わる問題となる点だ。なぜなら、『枕草子』の成立は数次に分けられるという考え方が現在の通説となっているものの、清少納言が仕えた中宮定子は長徳二年（一〇〇〇）十二月に亡くなっており、日記的章段に描かれる出来事の時期などから、この時期には大部分が出来上がっていたと考えられるからだ。[注5] 道綱が「ふの殿」と呼ばれるようになる寛弘四年には、清少納言はすでに宮仕えを退いてから七年近く経っていたと考えられ、そのような時期のものと推定できる呼称を含む「打聞」が『枕草子』中に存在することは見逃せない。

さらに、第二八七段もまた、定子の崩御から少なくとも一年近く経った時期のものだとわかる。この章段には「道命阿闍梨」という呼称が見えるが、道命が阿闍梨になったのは、長保三年（一〇〇一）十一月であることが太政官符によって判明するからだ。[注6] つまり、この二つの章段は、「定子崩御後」という視界をそこに開くものなのである。たとえこれらの章段の呼称に部分的な手直しが入っているとしても、これらの呼称自体が執筆時期を表す指標であるかのように機能するため、過程の如何に関わらず、この部分が定子崩御後に書かれたかのような印象は変わらない。

その他にも、この二つの章段には複数のつながりがある。まず、第二八七段に登場する道命阿闍梨は道綱の息子であり、道綱母は道命の祖母にあたるという関係性である。また、第二八七段では盂蘭盆に関わる歌が詠まれたのに続き、第二八八段では法華八講（ただし、『拾遺和歌集』の詞書などによると、ここで行われたのは経供養であったらしい）に関わる歌が詠まれる点にも連続性が認められる。そして、歌の性質においても、この二章段の歌は、共に笑いの要素を含む。第二八七段の歌は、自分で海に突き落とした男親を供養する者への揶揄の歌であり、第二八八段の歌は、法華八講が終わった

からゆっくり管弦の遊びや作文をしようと、のびのびとその解放感を歌い上げる一種のユーモアや余裕を感じさせる歌である。さらに、道綱母の生没年は承平六年（九三六）頃―長徳元年（九九五）、道命の生没年は天延二年（九七四）―寛仁四年（一〇二〇）であり、第二八七段と第二八八段の内容は、いずれも『枕草子』成立からそう遠くない時期の話と推定できる。

それに対して、第二八九段の登場人物は道命阿闍梨や道綱母の親戚ではなく、その話の内容においても、盂蘭盆や法華八講との連続性を持たない。そして、この段で語られる歌は切実なものだ。この歌に対しては、「いみじうあはれにをかし」という評が付され、そこには業平とその母の気持ちに寄り添うような態度が見られる。先程まで笑みをたたえて歌を語っていた作者が突然真顔に戻ったかのような落差がここには存在しているのだ。さらに、第二八九段の業平の母、伊都内親王が亡くなったのは貞観三年（八六一）で、『枕草子』成立より百年以上も前である。この第二八九段の話は『伊勢物語』第八四段にも見えるが、たとえば『枕草子』とほぼ同じ時期に成立した『源氏物語』の絵合巻では、「近き世」の物語である『正三位』に対し、『伊勢物語』は「ふりにし跡」と忘れ去ってはいけないと擁護され、少し前の時代の物語と認識されている様子が見える。[注7] 第二八九段は、この点でも、同時代的な話である第二八七段や第二八八段との間に差を抱えている。

つまり、第二八七段・第二八八段と第二八九段との間の連続性は弱いものでしかなく、むしろ断絶の方が大きいのだ。[注8] そして、能因本ではこの辺りの章段配列は三巻本と変わらないが、前田家本には注目すべき現象が見られる。前田家本では、三巻本の第二八七段と第二八八段に相当する章段は連続して存在するものの、第二八九段に相当する叙述はどこにもないのである。前田家本は、能因本と堺本との合成本と言われている。前田家本合成前の能因本に第二八九段に相当する叙述があったのかは定かではないが、現在の能因本にある叙述が前田家本にないということは、この業平の母の歌についての歌語りが、前の段に続くべきものではないと判断されて削除された可能性をも示すものなのである。

以上のように、第二八七段・第二八八段と、第二八九段とは、一連の打聞章段と見なすには、いくつもの問題を抱えている。第二八七段・第二八八段は、含まれる呼称によって定子崩御後に書かれたような様相を呈するのに対し、第二八九段は、（一）歌の詠者の間に存在する血縁関係、（二）仏教行事に関する和歌、（三）笑いの要素を含む歌、（四）描かれた出来事の時期、といった前の二章段が共通して持つ要素をどれ一つとして持ち合わせていない。そして、前田家本が最後の一章段を削除してしまった可能性までもがあることを併せ考えると、第二八九段の位置がいかに落ち着かないものかということがよくわかるはずだ。つまり、前の二章段は、「ここもとは打聞になりぬるなめり」という断り書きをもって、叙述に一つの区切りをつけているのであり、第二八九段は「また」という接続詞によって、そこに思い出したかのように添えられているに過ぎない。あたかも、第二八九段はもともとこの場所にあったのではなくて、他の段に含まれていたものの断片が何らかの事情によってこの場所に紛れこんでしまったかのようだ。

このように考えてみると、では、なぜ第二八九段はこの場所に存在しているのか、という疑問が起こる。ここからは、この第二八九段と『伊勢物語』、そして『枕草子』の他の章段とがそれぞれどのように関わるのかということについて考えたい。

二　『枕草子』と『伊勢物語』

はじめに、第二八九段と『伊勢物語』の関わりについて検討したい。第二八九段の話は『伊勢物語』以外に、『古今和歌集』や『業平集』にも見える。まず、『古今和歌集』・『伊勢物語』の本文と、『枕草子』第二八九段の本文を挙げる。

【『古今和歌集』巻第十七・雑歌上・九〇〇・九〇一番歌】

業平朝臣のははのみこ長岡にすみ侍りける時に、なりひら宮づかへすとて時時もえまかりとぶらはず侍りければ、しはすばかりにははのみこのもとより「とみの事」とてふみをもてまうできたり、あけて見ればことばはなくてありけるうた

老いぬればさらぬ別もありといへばいよいよ見まくほしき君かな

返し

世中にさらぬ別のなくもがな千世もとなげく人のこのため

【『伊勢物語』第八四段】

むかし、男ありけり。身はいやしながら、母なむ宮なりける。その母、長岡といふ所にすみたまひけり。子は京に宮仕へしければ、まうづとしけれど、しばしばえまうでず。ひとつ子にさへありければ、いとかなしうしたまひけり。さるに、十二月ばかりに、「とみのこと」とて御文あり。おどろきて見れば歌あり。

老いぬればさらぬ別れのありといへばいよいよ見まくほしき君かな

かの子、いたううち泣きてよめる。

世の中にさらぬ別れのなくもがな千代もといのる人の子のため

【『枕草子』第二八九段】

また、業平の中将のもとに母の皇女の、「いよいよ見まく」とのたまへる、いみじうあはれにをかし。ひきあけて見たりけむこそ、思ひやらるれ。

『枕草子』中の『伊勢物語』と関わる可能性のある記述は、第六〇段「河は」の中の「天の川原、「七夕つめに宿からむ」と、業平がよみたるもをかし。」という一節と、この第二八九段の二箇所だが、これらは、『伊勢物語』よりも『古今和歌集』に近い形だという西耕生氏の指摘がある。[注9] 西氏は、高階師尚が斎宮と業平との不義の子だとする伝承から、高階氏を外戚とする中宮定子に配慮して、『枕草子』が『伊勢物語』を忌避していると見ている。この伝承に基づくと見

られる記事が、『権記』寛弘八年（一〇一一）五月廿七日条にある。敦康親王への譲位を検討する一条天皇に対し、藤原行成が「故皇后宮外戚高氏之先、依斎宮事為其後胤之者、皆以不知也、今為皇子非無所怖、能可被祈謝太神宮也」（増補史料大成）と答える部分である。しかし、その後、この部分の本文には問題があることが土方洋一氏によって指摘され、『権記』にはもともとこの記述はなく、院政期に流布し始めた伝承が書き込まれたものと分析されている。[注10] 土方氏の指摘のように、この伝承が院政期以後のものだとすると、『枕草子』は少なくとも執筆時においては『伊勢物語』を忌避する必要がないはずである。

さらに、第七八段「頭中将のすずろなるそら言を聞きて」内の記述も問題となる。この章段内の「いをの物語」という本文が「いせの物語」の誤写である可能性を持つからだ。もし『枕草子』中に『伊勢物語』の書名が出てくるならば、『枕草子』の『伊勢物語』忌避の姿勢を認めることはできないだろう。この問題の箇所は、清少納言のことをひどく憎んでいるらしい藤原斉信からの文を主殿司が届けて来る場面にある。主殿司は「御返事とく」と言うが、清少納言は主殿司をいったん帰し、受取った文もすぐに見ない。すると、主殿司が再度来て、斉信の言葉を次のように伝える。

「『さらば、そのありつる御文を給はりて来』となむ仰せらるる。とくとく」と言ふが、「いをの物語」なりやとて、見れば、青き薄様に、清げに書きたまへり。心ときめきしつるさまにもあらざりけり。

この部分は、三巻本第一類本（陽明文庫蔵本など）では「とく〳〵といふかいをの物かたりなりや」、能因本（学習院大学蔵三条西家旧蔵本）でも「いをの物語」とあるのに対し、三巻本第一類本の一部や第二類本の大半では「いせの物かたり」となっている。清水浜臣説では「えせのものがたりといふ事也。頭中将より、けさう心にてえせ事をいひおこせるにはあらぬかと清少の思ふなり。」とするが、[注11] 他に用例がなく、解しづらい。「魚（いを）の物語」（『角川文庫』）、「かいをの物語」（『解環』）という説もあるが、意味が通らない。

一方、これを『伊勢物語』を指すものと見る説もある。『春曙抄』は、「伊勢物語に、長岡の母より業平へ、とみの事とて御文ありといへり。頓は急々の事なればなり。」と説明する。やはりこの箇所はもともと「いせの物語なりや」という本文で、この『春曙抄』の説のように、『伊勢物語』第八四段を指したものと見るべきであろう。[注12]「を（遠）」と「せ（世）」は字形が似ていて誤写の可能性が高い上、用件はわからないもののとにかく急ぎの手紙だと語られる第七八段は、『伊勢物語』第八四段の話の重要な部分と対応すると考えられるからである。ここで、『業平集』（尊経閣文庫蔵本）五八番歌の詞書を見ておきたい。

ははみこながをかといふ所にすみ給ひける時、宮づかへいそがしうて、しばしばもえまからざりける、しはすのつごもりばかりに、とみのこと とて侍るふみに

このように、非常に短い形を取る『業平集』の詞書にも、「とみのこ

と」という表現は同様に存在する。つまり、この要素は省くことができないものであり、母からの文は「とみのこと」だからこそ効果的なのだ。あえて年の暮れが迫った時期に、歳を重ね死別する前に息子に会いたいと訴えるこの歌は、時機を逃さず折に合った歌を用意したかのような理知的な側面と、かつ残された時間が少ないことに対する切実な焦燥とを絶妙に併せ持ち、『枕草子』第二八九段の「いみじうあはれにをかし」という評がまさにぴたりとくる。そして、「とみのこと」と聞いた息子が真っ先に抱くのは、母の死の知らせではないかという危惧であり、文を見て、「とみのこと」は死の知らせではなく、母の会いたいという切迫した気持ちだとわかるところに、劇的な効果がもたらされるのである。

『枕草子』第七八段もまた、最初に主殿司が文を持って来た時、清少納言は「あやし。いつのまに何事のあるぞ」と不審がる。受け取る側は、『伊勢物語』同様、急ぎの文が来るという予測は持っていない。しかし、主殿司は、一度目は「御返事とく」と、そして、二度目に来た時も「とくとく」と、繰り返し至急の用件だと伝える。そして、やっと文を見た清少納言は、「心ときめきしつるさまにもあらざりけり。」と思う。「心ときめきす」は、不安ではらはらする時にも、期待感でどきどきする時にも使われるが、ここは、文の内容への不安を表していると見るべきではないか。自分を憎む相手からの文には、どんなひどい言葉が書き連ねられているかわからない。だからこそ、清少納言は開封を先延ばしにした。そして、はらはらしながらやっと文を開けると、予測とは異なり攻撃的な手紙ではなかったことを「心ときめきしつるさまにもあらざりけり」と表現していると解釈できるのだ。

このように考えると、第七八段と『伊勢物語』第八四段とは、(一)予測していない時に急ぎの手紙が届く、(二)手紙の内容はわからないものの、手紙を運んできた者から、とにかく急ぎの手紙だという情報だけはもたらされる、(三)今までの状況からきっと良くない手紙であろうと不安を抱き、緊張しながら文を開く、という話の流れがぴたりと一致するのである。だから、三巻本第一類の「いをの物語」は、もともとは「伊勢の物語」という本文であり、第八四段を意識した表現と考えてよいものなのである。

この「伊勢の物語なりや」という表現は、定子周辺で『伊勢物語』第八四段がすでに話題にのぼっていたという前提を示すものだ。この表現は、それを受け止めて理解してくれる読者層が確実に存在したことの証であり、そのような層を想定して書かれたものと考えられる。一方、『枕草子』第二八九段では、業平とその母のエピソードと歌が語られ、賞賛されている。この記述を見ると、第二八九段の執筆時期は、第七八段が書かれる前、もしくは同時期と推定することができないだろうか。もちろん、確実なことがわからない以上、それはあくまでも推測に留まる。しかし、すでに定子周辺で話題にのぼり、共有されている『伊勢物語』第八四段の話を改めて書き留めて賞賛するという行為は考えにくい。『枕草子』第二八九段は、こうして清少納言が業平の母の歌を話題に出し始めたからこそ、定子や周辺の女房もこのやり取りへの興味を共有するきっかけができたのではないかという想像をも誘うほどに、第七八段との関係性を示す記述であるのだ。

今まで検討してきたような第七八段と第二八九段との関係性を考える限り、「ふの殿の御母上」という呼称を含み、『枕草子』の中でも最も遅い時期に執筆・加筆されたと推定できる第二八八段は、第二八九段よりもかなり後に執筆された可能性が高い。よって、第二八九段は、第二八八段を書いてすぐに自然に浮かんでくる連想にしたがって書かれたとは言いがたい。ここにも、第二八八段と第二八九段の間に存在する断絶が認められるのである。

三　章段配列が作り出す「定子崩御後」の時間

『枕草子』第二八七段・第二八八段についての注釈書などの解説には、ひとつの傾向が存在する。たとえば、湯本祐之氏は、第二八七段について次のように解説する。[注13]

道命阿闍梨は藤原道綱の長子であるから、作者とは無縁の人ではない。作者の姉が藤原理能に嫁しており、この理能の姉（妹？）が道命の父道綱の母（『蜻蛉日記』の作者）である。

道命阿闍梨や道綱母が清少納言の縁戚にあたるという指摘は、『角川文庫』（第二八七段補注）、『解環』（第二八八段語釈）にもある。一方で、『新大系』は、道命阿闍梨について「藤原道綱の息。従って定子の従兄。」と説明する。たしかにこういった説明も可能であったはずだ。けれども、定子の縁者という説明は他にはほとんどない。むしろ、稲賀敬二氏は、次のように、清少納言の縁者という点をさらに明確に意識した説明をしている。[注14]

道綱の母は前段（「右衛門の尉なりける者の」大系307段）に出て来た道命の祖母。清少納言の姉が嫁した理能は、道綱の母の兄である。このあたりの打聞き、噂話が、どんな人々を中心にして語られ、広まり、清少納言の耳に入ったかという経路も想像できるわけである。

道命や道綱母が清少納言の縁戚だという説明も、定子の縁者だという説明も、どちらも間違いではない。それにも関わらず、清少納言の縁戚を意識した説明が多いという傾向には、呼称から推定される執筆年代の遅さや、清少納言が宮仕えを退いた後の執筆だという推定が、意識的にせよ、無意識にせよ反映されているようにも見える。さらに言うならば、ここに限って宮中とは無縁に見える歌語りが存在することを、宮仕えを退いた作者という点と併せ、何とかして説明しようとする意識が働いているのではないだろうか。そこで持ち出されてくるのが、その歌の詠者は清少納言の縁者であった、という本文からは直接的に読み取られることのない関係性なのである。つまり、この宮中や定子とは無関係に見える打聞章段は、作者の〈私〉の面を用いて〈補助線〉を引かないと位相を説明しづらい、不安定な位置にあると言えるのではないか。もちろん、そのような〈補助線〉を用いた理解が正しいという保証はない。これらの歌がどのような経路を通じて作者の耳に入り、書き留められたかは、不明と言う他ないからである。それでもなお、宮仕えを退いた作者が自らの縁者の歌を書き留めたという像がそこに結ばれることには、三巻本の配列も大きく影響しているのではないか。以下、その可能性について検討したい。

まず、第二八六段「うちとくまじきもの」の段に注目したい。こ

の章段の最後は、海女の浮上の様子について「舟の端をおさへて放ちたる息などこそ、まことにただ見る人だに、しほたるるに、落し入れてただよひありくをのこは、目もあやにあさましかし。」と結ばれる。この「落し入れて」は、第二八七段の「伊予国よりのぼるとて、波に落し入れけるを」と、語句の上でも、海にまつわる話という点でも対応し、作者によるものか否かはわからないが、意図的な章段配列の意識が見られるということは確かであろう。

しかし、他にも、見逃せない点が第二八六段にはある。以下のような描写だ。

船の路。（中略）若き女などの袴、袴など着たる、侍の者の若やかなるなど、櫓といふもの押して、歌をいみじううたひたるは、いとをかしう、やむごとなき人などにも見せたてまつらまほしう思ひ行くに、…

この「やむごとなき人」の指示対象については確実なことはわからない。だが、この一節は、この船旅の印象を大きく左右するのではないか。「やむごとなき人」という表現からは、宮仕えによって初めて知ることとなった、定子を中心とした高貴な人々が想像される。たとえ作者としては具体的な指示対象を想定していなかったとしても、中宮定子付き女房が書いた『枕草子』という前提を知る読者にとっては、定子を想起してしまうことは止められるものではない。そして、作者が、海路を使って遠くへ行くことがあったとしたら、やはりそれは宮仕えを退き地方に下る時の情景を想像させるのではないか。それは読者の想像に過ぎないのだが、そのような想像のもとに読んだ場合、「見せたてまつらまほしう」という思いは、高貴な人は遠出が難しいという事情とは別に、もしかするとその人はすでにこの世にいないのかもしれないという、書かれていない背景を思い起こさせる力をも持つこととなるのだ。つまり、「うちとくまじきもの」の段もまた、定子崩御後という時間を想起させる要因を持った章段なのである。

この「うちとくまじきもの」の段に続く第二八七段・第二八八段が、定子の亡くなった後の時期に用いられた呼称を含むことや、定子や宮中とは無縁に見える歌について語っていることは、第二八六段から第二八八段までは、清少納言が定子崩御後に宮中から去り、都から離れて、身内の歌を書き留めながら残りの人生を過ごす、といったひとつの〈物語〉を作り出すように機能していると考えられる。それは、執筆時の作者の意図として限定できるものではなく、作者もしくは後世の人の手による編纂意図として章段配列にそのような操作が加えられたものだと考えるのである。つまり、章段配列として定子崩御後の時空を作り出すという意図がここに存在すると私は思うのだ。

このように考える時、第二八九段の位置付けが大きな問題になる。定子崩御後を想起させるような章段配列の中にあえてこの章段が置かれているとすれば、その位置をどのように理解することができるのか。私は、定子崩御後の時空を作り出すこの章段群に配置された時、この第二八九段は単なる歌語りといった位置付けを越えて、定子の死をも意識させる機能を持つようになると考える。[注15] 無論、業平

の母と、定子との間には、様々な点において差異が存在する。特に大きな差異と思われるのは、業平の母が死を予感するのは老いゆえであるのに対し、定子が亡くなったのは、『権記』によれば二十四歳、『日本紀略』『栄花物語』によれば二十五歳と、老齢というにはあまりにも若すぎる年齢だという点である。

しかし、死の予感という点については、『栄花物語』において、死を予感する定子が繰り返し描かれることは見逃せない。例えば、初めて敦康親王が一条帝に対面する時、定子は「このたびは参るにつつましうおぼえはべれど、今一度見たてまつり、また今宮の御有様うしろめたくて、かく思ひたちはべりつるなり」「身をばともかくも思ひたまへず。ただ幼き御有様のうしろめたさに」（かかやく藤壺①三一一）と、自分の亡き後の敦康親王の行く末を案じる。そして、その直後に第三子の妊娠がわかった時も、自分の厄年を理由に、本来喜ぶべき妊娠を不安なことと捉え、「それをうれしと思ふべきにもはべらず。今年は人の慎むべき年にもあり、宿曜などにも心細くのみ言ひてはべれば、なほいとこそあらむにつけても心細かるべけれ」（かかやく藤壺①三一二）と不安をもらすのである。このような定子の意識は、かかやく藤壺巻において、「かつはわれいつまでとのみ、まづ知るものに思さるるもいみじうぞ。」（①三一四）、「御おととの四の御方をぞ、今宮の御後見よく仕まつらせたまふべきやうに、うち泣きてぞのたまはせける。」（①三一七）、「月日過ぎ行くままに、皇后宮はいとどものをのみ思し嘆くべし。」（①三一八）と繰り返し語られる。さらに、とりべ野巻でも、「かくて八月ばかりになれば、皇后宮にはいともの心細く思されて、明暮は御涙にひちて、あはれにて過ぐさせたまふ。」（①三二一）、「今はただ念仏を隙なく聞かばやと思しながら」（①三二二）と、出産による死を予期し、敦康親王の後見を同母妹に託してその将来を心配し続ける定子が描かれるのである。そして、定子は、その予感が当たったかのように、出産によって、長保二年（一〇〇〇）十二月十六日、命を落とす。

『栄花物語』の記述は、実際に定子が死を予感していたという証明にはならない。けれども、重要なのは、そのような定子像が描かれていることそのものなのである。死を予感する定子像は、『栄花物語』が書かれた当時、広く共有されていたイメージなのかもしれない。定子の辞世歌は、『栄花物語』に「御帳の紐に結びつけさせたまへりける」（とりべ野①三二八）という状態で、三首残されていたと書かれている。この歌は『後拾遺和歌集』哀傷の巻頭歌でもあり、その詞書でも、『栄花物語』同様に辞世歌が御帳の紐につけられていたと語られる。このように定子が事前に辞世の歌を残していたと語る『後拾遺和歌集』もまた、死を予感していた定子像を表わすものである。また、このような定子像は『後拾遺和歌集』や『栄花物語』を通じてさらに広められていった可能性もある。

『栄花物語』では、死を予感し、敦康親王のことを思い続ける定子が何度も描かれる。定子は、業平の母のように子供になかなか会えない状況にいるわけではない。しかし、死の予感を抱き、子供のことを考える母という像において、二者は重なるのではないか。厳密な対応関係がそこにあるかということよりも、定子崩御後の時間を作り出す章段群の中に位置する『枕草子』第二八九段を読んだ時に、読者が子供を残して亡くなった定子のイメージをそこに重ねる可能

性があるということが重要だと思うのである。

さらに、第二八九段と第七八段との関連性もまた、第二八九段が定子を想起させる要因となる。「伊勢の物語なりや」という第七八段の表現は、『伊勢物語』第八四段が定子周辺で共有され、やり取りに活かされていたことの証であった。つまり、『伊勢物語』第八四段のエピソードと歌そのものが生前の定子を取り巻く世界の〈記憶〉と密接に関わるものなのである。そして、定子崩御後の時間を作り出す章段群の中に第二八九段の叙述が置かれた時、第二八九段は今は亡き定子を追慕するものへと変貌する。『伊勢物語』の業平の母の話とその歌の見事さを賞賛し、さらに定子や他の女房とその賞賛を共有していた過去を振り返りながらも、定子亡き今になって改めてこの話と歌と向かい合うと、それはもはや単なる賞賛の対象に留まるものではなく、我が子をこの世に残して死んでいく母の無念さを体現するという点において、まさに定子そのものだったと改めて気づく作者の姿がそこに浮かび上がるのだ。そして、第二八九段は、子を残して亡くなった定子の心を思いやり、この業平の母の話と歌を改めて噛みしめ、書き留める作者の姿を描き出すものとして機能するようになる。たとえ、本稿で推測したように、実際には第二八九段が第七八段と同じ頃、つまり定子の生前に書かれたものであったとしても、この定子崩御後の時間を作り出す章段群に置かれた時、読者にとって第二八九段は定子を追悼する作者を描き出す叙述となるのである。

このように考えると、三巻本『枕草子』の第二八六段から第二八九段にかけての章段配列は、まず第二八六段「うちとくまじきもの」の段で、作者が宮仕え後に都を離れて地方に下ったことをイメージさせ、第二八七段・第二八八段においては、宮中を退いた作者が縁者の歌を書き留めながら残りの人生を過ごしている姿を想起させるものである。そして、第二八九段の歌語りによって、子供を残して亡くなった定子のことを回想しながら作者が『枕草子』の最後の部分を書いているという像を作り上げるものなのではないか。それは、作者自身の執筆時の意図によるものというよりは、三巻本の意図によって読者の想像を誘うように仕向ける配列によるものなのである。[注16] 章段ひとつひとつを読んだ時には、定子崩御後という時空は必ずしも明確になるわけではない。ここは、三巻本の章段配列によって、そのように「読ませる」ように仕組まれているのではないか。このような三巻本の方向性は、直接的に定子の死を描くことのない『枕草子』において、作者の執筆時の意図を越え、定子の死とその後を、読者の期待に応えて、そこに現出させるかのようでもある。[注17] そして、このような章段配列においては、第二八九段「また、業平の中将のもとに」の段は、今は亡き定子を回想する作者という像を想起させるものとして、有効に機能していることを認めたいと思うのである。

おわりに

現在の『枕草子』の研究においては、底本に三巻本が使われることが主流になっている。そこには、三巻本、能因本、前田家本、堺本の四系統の本文の中では、三巻本がもっとも古態に近いのではな

いかという説が定説になりつつあるという事情が大きく影響している。しかし、今回、本稿において三巻本のごく一部の章段配列を検討しただけでも、その配列は、古態に近いといった素朴な原初形態を持つものではなくて、執筆時の意図やその当時あり得た範囲の解釈までをも越えて、あるひとつの像を結ぶように読者を誘導するかのような、一定の方向性を持ったテキストであることが見えてきた。今後さらに検討が必要だとは思うものの、三巻本には、三巻本独自の論理があるのではないだろうか。

また、本稿で主に扱った第二八七段から第二八九段は、三巻本『枕草子』の中でも、最後の部分に存在する章段である。たとえば『新全集』の章段の分け方に従うと、『枕草子』の最後の章段は、第二九八段「まことにや、やがてはくだると言ひたる人に」である。三〇〇段近くの章段を有する三巻本において、今回主に検討してきた第二八九段は、最後の方に位置し、すでに作品の「終わり」が視野に入りつつある場所に置かれているのである。このこともまた、本稿で述べてきた「定子崩御後」というイメージと深く結びついていると考える。三巻本の最初の章段は、言うまでもなく「春は曙」の段だが、四季の最初である春を先頭として叙述が開始される一方で、最後の章段には、「まことにや、やがてはくだる」と清少納言の下向についての話題が置かれているのである。そこには、「始まり」と「終わり」という意識が見られよう。

第二八九段以後の章段を見ると、数段隔てた後には、第二九四段「僧都の御乳母のままなど」において作者自詠の歌が語られ、その次の段の第二九五段「男は、女親亡くなりて男親の一人ある」では、作者が創作した物語の人物設定が語られる。さらに、第二九六段「ある女房の、遠江の子なる人を語らひてあるが」から第二九八段「まことにや、やがてはくだると言ひたる人に」では三章段連続で作者の自詠歌が語られて、そこで三巻本『枕草子』は終わるのである。つまり、第二八九段の後には、数段隔てて、清少納言の自作の和歌や物語が語られる章段群が存在しており、その章段群は、宮中や定子と密接な関わりを持たない[注18]。定子を中心とする世界から離れていく作者は、すでに、『枕草子』において本来語るべき対象であった定子周辺の「をかし」「めでたし」と繰り返し賞賛してきた世界から離れた場所に来てしまっているのである。もちろんそのような作者は、実際の清少納言そのものではなく、読者の想像する像にすぎない。しかし、読者の想像の中では、それまでは、定子や宮中について語るべきことがあるからこそ『枕草子』を綴ってきた作者は、ここでこの草子に書くべきことを失ってしまい、ひとまず思い浮かぶままに自分の縁者が詠んだ歌を書き留めてはみたものの、書いてすぐに、それは本来『枕草子』に書くはずだった定子周辺の世界にまつわるものではなかったことに気付く。このような、本来書くはずではなかったものを『枕草子』に書いてしまったという作者の意識が、第二八八段に「ここもとは打聞になりぬるなめり。」という断り書きを書かせたように見える。この断り書きは、女房という立場を離れて、書くことを失ってしまった作者の像を示すかのようだ。

ただし、このように『枕草子』の終わりを、宮仕えを退いた作者という像によって理解することは、三巻本の章段配列がそのように構成されているからこそ可能なのである。三巻本で『枕草子』を読

む時、私達はそこにある章段が時系列に添って順番に並んでいることを期待することはできない。しかし、期待することができないとわかってはいても、心の奥では、物語のように、「始まり」から「終わり」に向かって並ぶ叙述を期待してしまっているのではないか。そのような読者の心理を巧みに利用して、『枕草子』の終わりを演出する。三巻本はそのような章段配列を持ったテキストではないかと思うのである。

【注記】

（注1）三巻本『枕草子』の本文、章段番号は、新編日本古典文学全集『枕草子』（松尾聰・永井和子校注　小学館　一九九七年）によった。新編日本古典文学全集の底本は、三巻本系統第一類本の陽明文庫蔵本であるが、三巻本系統第一類本は「あぢきなきもの」（七五段）までの本文を欠いているため、その部分については、第二類本の相愛大学・相愛女子短期大学図書館蔵の弥富破摩雄氏・田中重太郎氏旧蔵本をもって補われている。また、能因本『枕草子』を引用する場合は、日本古典文学全集『枕草子』（松尾聰・永井和子校注　小学館　一九七四年）によった。日本古典文学全集の底本は、学習院大学蔵三条西家旧蔵本である。また、前田家本の引用は、『前田家本枕冊子新註』（田中重太郎　古典文庫　一九七一年）によった。なお、『枕草子』以外の散文作品を引用する場合は新編日本古典文学全集に、和歌を引用する場合には新編国歌大観CD-ROMに、それぞれよった。

（注2）『枕草子』と打聞の関係については、「枕草子という作品自体が、大局的に中宮定子に関する打聞集を目指していたと述べてもいいのだろう。」とする赤間恵都子氏の説もある。（「枕草子の打聞摂取――定子と清女の語る打聞」「金沢大学国語国文」二三　一九九八年二月）

（注3）本論中で用いた『枕草子』の注釈書とその略称は、以下の通りである。

- 『枕草子春曙抄（杜園抄）』（枕草子古注釈大成）誠進社　一九七八年　…『春曙抄』
- 塩田良平『三巻本枕草子評釈』上・下　学生社　一九五四年～一九五五年　…『塩田評釈』
- 萩谷朴『枕草子』上・下（新潮古典集成）新潮社　一九七七年　…『集成』
- 石田穣二『新版　枕草子』上・下（角川ソフィア文庫）角川書店　一九七九年～一九八〇年　…『角川文庫』
- 萩谷朴『枕草子解環』一～五　同朋社出版　一九八一年～一九八三年　…『解環』
- 渡辺実『枕草子』（新日本古典文学大系）岩波書店　一九九一年　…『新大系』
- 松尾聰・永井和子『枕草子』（新編日本古典文学全集）小学館　一九九七年　…『新全集』
- 上坂信男・神作光一・湯本なぎさ・鈴木美弥『枕草子』

上・中・下（講談社学術文庫）講談社　一九九九年～二〇〇三年　…『学術文庫』

（注4）『解環』は、道綱が長徳二年（九九六）十二月二十九日以後、長保三年（一〇〇一）七月十三日以前まで右大将だったことを挙げて、次のように述べる。

或いは、原形は「右大将との」であって、漢字「右」から「を」へ、「大」から「は（字母者）」へ、「将」から「らの」二字へ転化したか、「右たい将」を原形として、漢字「右」と「た（字母多）」二字が仮名「を（字母遠）」一字に、「い」が「は（字母八）」に、「将」が「らの」二字に、それぞれ字形相似によって転化したか、などの場合を考えることが出来よう。

しかし、「将」が「らの」二字へ転化する可能性や、「右」「た（字母多）」が「を（字母遠）」に転化する可能性はそれ程高いものとは言えないのではないかという疑問も残る。

私は、三巻本の「をはらのとのゝ御はゝうへ」は、もとは「ふの殿の御母上」という本文だったのが、「ふ」と「小」の字形相似と後文の「小野殿」に引かれたことにより、（一）「ふの殿」→「小の殿」という誤写が起こり、さらに、（二）二文字目の「の（字母能または農）」が「は（字母波または者）」と混同され、「の」から「殿」へと続く連綿の縦線が「ら（字母良）」に見間違えられて、「小の殿」→「小はら殿」→「小はらの殿」と変化したものと考える。能因本や前田家本の「又」がもとからあったかは判断が難しいものの、元は「ふの殿の御母上」であったと考えるならば、少なくとも、能因本の「小野殿の母上」は、（一）の誤写の結果によるものと推定でき、前田家本の「ふの殿ゝはゝうへ」は、「御」の有無を除いて本来の本文と一致することになる。

（注5）中島和歌子氏は、『枕草子』の成立を次のように説明する。

第一次成立時期は、跋文の「左中将、まだ伊勢の守と聞こえし時」と、一三七段「殿などのおはしまさで後」、二五九段「御前にて人々とも」から、長徳二年（九九五）秋の長期里居中と考えられている。経房が「左中将」と呼ばれる最終日の長保三年（一〇〇一）八月二十五日までには、第二次本（跋文付き）が成立した。

しかし、一〇二段の「左兵衛督」は三巻本勘物以来実成と考えられており、任官した寛弘六年（一〇〇九）三月四日までは加筆していたことが確かだとされている。（「枕草子二十五年――「この草子」をどこに置くか――」「国語と国文学」八二―五　二〇〇五年五月）

なお、第二次本成立以後の加筆の跡と見られる呼称には、第二八七段、第二八八段の他、第八三段「式部丞忠隆」（寛弘元年以後）、第一〇〇段「内蔵頭」（寛弘二年以後）、そして、中島氏の指摘する一〇二段「左兵衛督」、がある。

（注6）『大日本史料』第二編之四　長保三年十一月一日　太政官符（平松文書）

（注7）該当箇所の本文は、以下の通りである。

次に、伊勢物語に正三位を合はせて、また定めやらず。

これも右はおもしろくにぎははしく、内裏わたりよりうちはじめ近き世のありさまを描きたるは、をかしう見どころまさる。

平内侍、

「伊勢の海のふかき心をたどらずてふりにし跡と波や消つべき

世の常のあだごとのひきつくろひ飾れるにおされて、業平が名をや朽すべき」と争ひかねたり。

（『源氏物語』絵合②三八一）

（注8）『集成』は、第二八九段について「前段の小野殿と小野宮惟喬親王との連想で、惟喬親王と縁の深い業平母子の歌語りの打聞を紹介。」と説明するが、『伊勢物語』第八四段は小野や惟喬親王と直接の関わりを持たないことから、この考えには従うことができない。

（注9）「中宮定子と伊勢物語――枕草子の輪郭――」（片桐洋一編『王朝文学の本質と変容　散文編』二〇〇一年　和泉書院）

（注10）「秘事伝承とその成長――『伊勢物語』の周辺――」（「日本文学」五六―五　二〇〇七年五月）

（注11）前田夏陰書入『春曙抄』において「濱臣云」としてその説が書き入れられている。本文は、『国語国文学研究史大成六』（一九六〇年　三省堂）所収の翻刻によった。

（注12）「いをの物語」を『伊勢物語』を指すものと見る説としては、第八四段に限定せず、「伊勢は全篇業平の情事が主題だから、すなおに懸想文の意と解してはいかがであろう。」とする『塩田評釈』もあるが、この解釈は本文から離れすぎるように思われる。

（注13）「枕草子鑑賞Ⅱ（第二八五段～第三〇〇段）」（『枕草子講座三』一九七五年　有精堂）

（注14）「五二　小原の殿の御母上とこそは」（稲賀敬二・上野理・杉谷寿郎『枕草子入門』一九八〇年　有斐閣）

（注15）津島知明・中島和歌子編『新編枕草子』（二〇一〇年　おうふう、解釈に関わる注は中島氏担当）は、第二八九段の業平の母について「師走」に敦康らと死別した「母」の「宮」に擬えるか。」とする。

（注16）三巻本の第二八六段「うちとくまじきもの」から第二八九段「また、業平の中将のもとに」までの配列は能因本も同じだが、その後の章段は能因本の方が多く、最後の章段も違うことから、同様に論じることはできない。

（注17）定子崩御後を描かない『枕草子』の空白を埋めるかのように、中世以降、たとえば『松嶋日記』のように、定子亡き後都を離れ地方に赴く清少納言像が描かれるようになる。特に、宮仕えを退いた清少納言について「乳母子のゆかりありて、阿波の国に行きて、あやしき萱屋に住みける。」と語る『枕草子』能因本の奥書や、同様に「乳母の子なりける者に具して、遥かなる田舎にまかりて住みけるに」と書く『無名草子』には、定子崩御後に地方に下る清少納言像が見られる。そこには、『枕草子』に描かれていない「その

後」を知りたいと思い、想像する者の期待が反映されているとも言えよう。本稿において指摘してきた、定子崩御後の時空を作り出す章段配列は、直接の影響関係はなかったとしても、方向性としてはこれらの記述と同じものを持つと思われる。

（注18）第二九〇段以降の章段配列を見ると、第二九〇段「をかしと思ふ歌を」は「下衆」について言及し、そこから「よろしき男」をほめる「下衆女」を描写する第二九一段「よろしき男を、下衆女などのほめて」が続く。その次の第二九二段「左右の左衛門尉を判官といふ名つけて」は諸本間の異同が大きく位置づけが難しいが、さらに続く第二九三段「大納言殿まゐりたまひて」は、伊周を賞賛する清少納言に対して、伊周が「かやうの事めでたまふ」と笑う話で締めくくられており、目下の女にほめられる男という点で第二九一段からのつながりが認められる。また、この第二九三段で定子の兄弟の話が出たのをきっかけとして、「僧都」（隆円）の乳母や「御匣殿」が登場する第二九四段「僧都の御乳母のままなど」が続く。

これらの章段を見ると、第二八七段からの打聞章段群の後に置かれているにも関わらず、第二九三段・第二九四段に定子が登場する。ただし、章段配列上、このふたつの章段は、あくまでも定子の兄弟が登場する点において相互につながり、並べて置かれているのだ。そして、これらの章段における定子は、第二九三段では、その前半で、わずかに「宮の御前にも笑ひきこえさせたまふ」「上も宮も興ぜさせたまふ」と語られるのみで言葉を発せず、後半では直接登場することさえない。第二九四段でも、最後の一文以外には定子は登場せず、最後のみ「など、かく物ぐるほしからむ」と笑う様子が描かれるが、その言葉は章段全体の流れを変えたり、それまでの話の位相を変化させるものではなく、単に添えられたものの如くである。この点は、定子の言葉によって話の流れが大きく左右され、意味づけが変わってゆくことの多い他の日記的章段と比べて大きな違いと言えるだろう。

第二九四段で作者自詠歌が語られたのを始めとして、第二九五段以降では作者創作の物語や和歌が語られ、次々に定子と直接結びつかない叙述が並ぶが、第二九五段以下に見られる定子との距離の遠さという特徴は、第二九三段・第二九四段にすでにその兆しが見られるのである。この第二九三段・第二九四段において定子の存在が大きな役割を持たないという点は、それぞれの執筆段階（それは定子生前だった可能性も十分ある）においては、伊周賛美という主題や火事に遭った男の話を重点的に書くために必然的に起こった現象に過ぎないのだろう。けれども、編纂意識の面から見ると、第二八七段から続く定子崩御後を意識させるような打聞章段群から、清少納言の地方下向をほのめかすかのような巻末までは、様々なつながりによりつつも、大きな流れとしては、定子という中心を失った世界を作り

出すように構成されたものと理解できると思われる。そして、このような章段配列を作り出す編纂意識のもとでは、定子が登場する第二九三段・第二九四段さえもが、定子崩御後に遺された者たちにまつわるエピソードを回想的に書いたものとしてここに置かれていると見ることができるのではないかと考える。

（いしがき　かなこ・北海道大学大学院博士後期課程）